『図書寮本寶物集』における和語表記の漢字

村田正英

一、目的と資料

そもそも中国伝来の漢字を日本語に翻訳して読み下してゆく時、文脈その他から、その場にもっともふさわしい和語が、その都度、字訓として採用されたであろうことは、訓点資料や、院政期の字書である『類聚名義抄』・『色葉字類抄』などにみられる多様な和訓から知られるとおりである。

しかし、一方で、それらの漢字を用いて日本語文を書き綴る場合には、それぞれの語に対して、一字乃至二字の漢字がほぼ常用字のごとくに用いられるということも、すでにいくつかの文献について先学の指摘がなされている。(注1)

本稿は、この「常用漢字」の有無に関して、鎌倉期の片仮名文である『図書寮本寶物集』を対象に、考えてみようとするものである。(注2)

すなわち、『図書寮本寶物集』に用いられた漢字がどういう和訓と対応しているか、また、その対応は一対一の固定的なものであるのか、あるいは、一対多の変化に富むものであるのかを見極めようとするものである。

『図書寮本寶物集』は、その片仮名字体および踊字の起筆位置等からみて(注3)、鎌倉前期の書写と思われる。筆者

は不明であるが、題簽に記されている「伝康頼自筆」というのは、文中に誤写・誤脱と思われる箇所がかなり存在することから、信じ難い。

『宝物集』には、諸本として、鎌倉期の書写とされる、七巻本系の『光長寺本宝物集』（弘安十年写、巻一のみの零本）・『本能寺本宝物集』（鎌倉末期～室町初期頃写、巻三のみの零本）・『最明寺本宝物集』（鎌倉末期写、巻四のみの零本）や、同じく七巻本系で室町期書写の『久遠寺本宝物集』（抜書本）が存在しており(注4)、『図書寮本』の漢字表記のいくつかの箇所については、これら諸本との対照によってその読みを推定することができるという利点をもつ。

二、『図書寮本寶物集』における和語表記の漢字一覧

次に掲げる表は、本資料に用いられた漢字のうち、和語を表記したと考えられるものを抜きだし、それらを五十音順に配列したものである。本表の作成にあたって留意した点は、次のとおりである。

1、当該漢字に対していかなる訓を充てるかについては、文脈および仮名書の例を考慮することによって一応の判断を下した。ただし、『宝物集』諸本の諸当箇所において、その漢字に相当する語の仮名書き例、あるいは附訓例が存する場合は、その読みを採用することとした。

〈例〉（傍線部分）

○〔図書寮本〕ヲモワシカラム妻ャツカヒヨカラム従者ャ馬車クヒ物キ物（12行）

〔光長寺本〕ヲモハシカラムメヤクヒ物ノ衣物（キ）ノ馬車従者（ムマクルマシユシャ）ナムト（10丁裏2）

2、『般若経』・『涅槃経』などの仏典や『和漢朗詠集』などからの直接引用の部分は、原典の表記に従うか、またはその影響を強く受けていると考えられるので、ここでは除外した。

〈例〉

○金般経　一切有為法　如夢幻泡影　如露亦如電　應作如是観（125行）

○都府楼纔観瓦色　観音寺只聞鐘聲（455行）

3、人名・地名および官職名は、慣用的な読みが少なくないので、除外した。

4、表は、《名詞》・《動詞》・《形容詞》・《副詞その他の自立語》・《助詞その他の付属語及び連語》の五類に分けて掲げた。

5、見出しの語形は、歴史的仮名遣いに従った。なお、動詞は連用形で掲げた。

6、所用漢字は、原則として、現行字体によった。

7、例数は、『図書寮本寶物集』において使用された当該漢字の全用例のうち、和語の表記に使用されたと考えられる用例の数を示す。

8、所在は、『図書寮本』の行数で示した。ただし、特に用例の多いものは、初めの数例の所在を挙げるにとどめた。

9、『図書寮本』において当該漢字に訓を附した例が存する場合は、見出し語の欄において、その訓に〔　〕を附して示すと共に、その例の所在を、各欄の最初に掲げた。

10、諸本と対照させて訓を決定したものは、その所在を示す数字の下に＊を加えて、私の推定によるものと区別

した。

11、複合語は、その構成要素にあたるそれぞれの語の項に重複して掲げた。その際、その複合語としての表記を所在欄に掲げた。

12、活用語において、活用語尾を送った例が存する場合は、その全所在を示した。

語形	所用漢字	例数	所在
《名詞》			
あかつき	暁	2	295 629 *
あき	秋	2	631 * 892
あし	足	3	179 301 手足 878
あした	朝	3	425 628 * 871
あは	粟	1	865
あひだ	間	2	122 576
あま	尼	3	194 395 693
あめ	雨	2	488 617

うち	うた	うし	いを	いろ	いま		いへ	いのち	いぬる	いぬ	いつつ	いち	いし	いくさ	いかづち
内	哥	牛	魚	色	今		家	命	戌亥	犬	五	市	石	兵	雷
6	8	4	2	7	7		7	13	1	3	1	1	4	2	1
217	184	244	222	23	42	家主	498	90	310	188	366	290	182	97	459
291	206	644	232	230	*	811	634	*		634			182	102	
346	311	*		248	487		*	143		*			218	*	
743	336	645		542	527		676	181		893			260		
768	396	*		542	552		*	229							
793	417	866		660	632		730	520							
	420			*	*		*	809							
	677			788	785		737	833							
					859		*	834							
					※副詞「いま」「いまさらに」「いまだ」参照。		811	842							
								845							
								850							
								851							
								892							

語形	所用漢字	例数	所在
うのはな	卯花	1	33
うみ	海	7	162 213 290 565 617 648 * 656 *
〔おほやけ〕	公	1	563
おもて	面	2	278 606
おや	親	1	親子 278
かがみ	鏡	1	422
かしら	頭	2	255 817
かぜ	風	4	243 628 * 630 * 869
かた	方	4	308 308 547 886 ※「きたのかた」参照。
かたち	形	4	353 606 791 794
かど	門	6	御門 60 * 198 358 445 475 482
かね	鐘	1	141
かは	河	2	137 656 *
かは	皮	2	190 829
〔かへる〕	蛙	1	225

かみ	上	1	551
かみ	神	2	276
			神主 687
かり	雁	1	301
き	木	6	218 349 450 460 580 655*
〔きさき〕	后	5	94 268 744
			女后 383
			母后 744
きじ	雉	1	225
きたのかた	北方	1	748*
きぬ	衣	1	狩衣 352 ※「ころも」参照。
きみ	君	6	92 744* 745* 746 747 ※「きむだち」参照。
			女君 742
きむだち	君達	3	305 346 746
〔くが〕	陸	1	222
くさ	草	6	131 512 535 656* 823 824

語形	所用漢字	例数	所在
くすり	薬	2	50 * 277
くち	口	1	188
くに	国	9	71 86 441 449 473 701 702 707 768
くび	頸	1	209
くも	雲	2	131 629 *
くらゐ	位	7	267 434 443 496 700 * 745 765
くるま	車	4	12 * 138 581 581
くろがね	鐵	3	189 884 893
けふ	今日	1	841
けむり	煙	1	292
こ	小	1	小虫 230
こ	子	29	52 59 63 * 65 68 * 69 * 103 215 305 345 501 503 516 520 522 525 527 724 725 726 727 727 729 748
	親子		278
	御子（みこ）		445 713 * 717

					こと	こし					こころ	ここのつ	こがね				
					事	腰					心	九	金				
					58	1					25	2	4				
仰事	ソラ事	890	654	283	22	24	心チ	心サマ	心サシ	心ウシ	369	25	323	47	女子		
202	449	891	*	431	35		82	76	767	316	532	*	367	425	368		
204		891	669	432	41						626	26		775			
		894	687	441	*						*	36		827			
		895	698	441	47						666	59					
			710	465	49						860	67					
			784	472	*							68					
			801	480	134							75					
			809	518	163							102					
			844	523	176							150					
			844	532	196							170					
			849	552	204							250					
			854	559	212							252					
			862	562	219							282					
			876	630	235							288					
			877	648	238							316					
			884	*	279							347					
					281												

語形	所用漢字	例数	所在
			返事 82 政事 448
ことし	今年	1	79
このみ	菓	1	868
こま	駒	1	892
これ	是	3	196 399 436
ころ	比	1	669
ころも	衣	1	651 ※「きぬ」参照。
こゑ	声	2	141 870
さき	前	3	177 270 753 ※「まへ」参照。
さけ	酒	2	195 692
さと	里	1	810
さる	猿	1	233
しし	鹿	11	836 837 838 839 840 840 842 843 844 845 892
した	下	3	159 166 349 ※「しも」参照。

した	舌	1	274
しま	嶋	2	524 525
しも	下	1	552 ※「した」参照。
しも	霜	1	631*
しるし	験	1	896
しろ	城	1	185
しろがね	銀	1	775
すず	鈴	1	197
すみ	角	1	角々 310
そら	空	1	222 ※「むなし」参照。
た	田	4	857 858 858 山田 420
たか	鷹	2	225 鷹カリ 714*
たかうな	笋	1	31
たから	宝	7	133 133 141 148 648* 768 781

語形	所用漢字	例数	所在
たきぎ	薪	1	188
たぐひ	類	1	877
たけ	竹	2	35 36
たま	玉	11	812 813 813 815 816 820 ※「たま（珠）」参照。
			玉ツクリ 813 816
			玉造 538 811 821
たま	珠	4	648 * 706 * 776 781 ※「たま（玉）」参照。
たましひ	魂	1	283
ち	血	2	54 164
ちから	力	3	44 763 872
ちご	児	1	26
ちち	父	13	45 70 86 89 91 193 200 329 515 518 548 553 788
つき	月	12	24 233 249 299 300 312 401 402 431 511 628 734
つち	土	1	857
つび	粒	1	一粒 875

つみ	罪	3	203 821 889
つるぎ	剣	2	104 138
て	手	8	54 * 133 504 505 833 883
	手スサヒ		420
	手足		878
てら	寺	3	山寺 118 827 831
と	外	1	792 ※「ほか」参照。
とき	時	12	43 44 244 301 427 444 475 784 820 868 872
			一時 362
とこ	床	1	279 ※「ゆか」参照。
ところ	所	4	373 394 833
			一所 592
とし	年	7	43 44 69 309 446 496 729 ※「ことし」参照。
としごろ	年来	2	384 688
との	殿	4	329 450 504 548 ※接尾語「どの」参照。
とばり	帳	1	417

語形	所用漢字	例数	所在
とも	共	1	281 ※接尾語「とも」参照。
とら	虎	1	228
とり	鳥	11	119 222 231 649 * 812 814 815 817 818 819 820
とを	十	1	517
な	名	4	51 110 208 766
なか	中	28	18 37 140 162 163 175 218 244 305 417 454 500 502 504 506 569 619
			645 649 * 649 * 650 * 671 708 719 752 * 857
			ヨノ中 151
			世之中 519 ※「よのなか」参照。
なかば	半	1	780
ななつ	七	2	177 192
なぬか	七日	3	198 390 521
なみ	波	1	53 * ※「なみ（浪）」参然。
なみ	浪	1	869 ※「なみ（波）」参照。
なみだ	涙	2	172 577

はは	はね	はな		はな	はと	はちす	はし	のち	の	ねのび	〔ねこ〕		ぬし	にしき	なむち
母	羽	鼻		花	鳩	蓮	橋	後	野	子日	猫		主	錦	汝
23	1	1		10	2	1	1	9	4	1	1		2	1	2
62	228	鼻ハシラ	花カツラ	150	235	775	33	152	11	378	226	神主	家主	351	41
77				357	237			345	18						*
77		257	574	371				354	98			687	811		200
87				451				358	222						
90				543				377							
92				608				549							
93				628				693							
193				*				798							
219				651				818							
243				722											
268															
309															
325															
329															
337															
339															
393															

語形	所用漢字	例数	所在
はやし	林	2	35 212
はら	原	1	松原 469
はり	針	1	884
はる	春	3	380 630 * 892
ひ	日	5	430 571 571 731
ひ	火	2	211 230
ひかり	光	5	144 231 511 794 794
ひだり	左	1	479
ひつ	櫃	1	長櫃 410
〔ひつじ〕	羊	3	882 644 * 645 *
ひつじさる	未申	1	310 ※動詞「まうし」参照。
ひと	人	28	7 86 88 148 195 220 336 368 497 520 533 561 567 628 632 647 *
	母后		744
			515 517 528 745 * 746

ふね	船	1	138
ふぢ	藤	1	331
ふたり	二人	14	63 90 92 305 316 346 516 520 522 523 525 527 530 746
ふたつ	二	1	836 ※「ふたり」参照。
ふすま	衾	1	291
ひとり	一人	7	18 * 92 289 374 702 773 785
	一粒		875 ※「ひとり」参照。
	一所		592
	一時		362
	一ムスヒ		166
ひとつ	一	9	600 624 810 840 870
	玉造人		811
	盗人		2 822 879
	人々		677
	ツカマツリ人		71
	ヲモヒ人		76
			675 685 696 790 865

語形	所用漢字	例数	所在
ふみ	文	6	47 100 162 301 538
			申文 537
ほか	外	2	161 614 ※「と」参照。
ほど	程	1	449
ほとけ	佛	25	111 365 434 591 595 598 599 600 602 608 657 * 694 696 756 757 759
			760 789 792 793 795 806 856 865 871
ほとけ	仏	9	133 157 276 610 806 856 863 867 878
ほね	骨	2	24 * 249
ほら	洞	1	135
まつ	松	1	松原 469
まつりごと	政	2	700 *
			政事 448
まど	窓	1	488
まなこ	眼	5	24 * 172 250 274 774
まへ	前	2	157 226 ※「さゝき」参照。

むたり	むし		むかし	みや	みみ	みな	みっか	みづ	みつ	みち	みたり	〔みさご〕		み			
六人	虫		昔	宮	耳	皆	三日	水	三	道	三人	鵜		身			
1	5		23	4	2	2	1	12	1	9	1	1		18			
742	小虫	189	810	42	487	24	196	404	27	872	63	672	226	850	21		
	230	223	826	135	745	250	520		222	※「みたり」「みっか」参照。	626			892	44		
		390	835	150	*				233		626				51		
		460	850	193	754				252		774				140		
			851	260	*				427		822				142		
			857	323	754				584		847				217		
			863	389	*				618		865				230		
				497					647		890				256		
				515					*		894				263		
				542					647						273		
				591					*						446		
				603					656						581		
				631					*						587		
				*					656						648		
				676					*						*		
				*					780						730		
				689											846		
				766													

語形	所用漢字	例数	所在
むま	馬	4	12 * 72 644 * 645 *
むまご	孫	1	499
むめ	梅	3	349 450 630
め	妻	8	12 * 322 388 399 403 519 547
もと	本	3	579 580 606
	妻夫		279
もの	物	21	3 7 7 10 34 50 51 150 533 863
	クヒ物		13
	キ物		13
	織物		351
	食物		510
	敷物		540
	（〃者〃の意）		25 64 526 769 864 881
もも	桃	1	876
や	箭	1	831

ゆき	ゆか	ゆ			やまひ								やま	やしろ
雪	床	湯			病								山	社
2	1	1			17								30	2
35	582	584	851	31	病ヒ	山寺	山立	山田	山ホトヽキス	山サト	山カツ	山カヽチ	736	133	339
37	※「とこ」参照。			38	258	118	506	420	34	723	115	188	775	138	
				255		827	566		382				775	161	
				258		831								209	
				263										290	
				266										297	
				268										300	
				270										314	
				271										315	
				273										372	
				566										521	
				572										531	
				643										618	
				*										634	
				644										706	
				*										*	
				730										713	
														*	

語形	所用漢字	例数	所在
ゆふべ	夕	2	628 * 871
ゆみ	弓	2	831 832
ゆめ	夢	2	354 633
よ	世	6	321 547 880
			御世 152 442
			世之中 519 ※「よのなか」参照。
よ	夜	3	299 731
			夜打 506
よのなか	世中	2	391 518
わし	鷲	1	228
われ	我	8	203 431 467 468 772 784 785 841 ※「わが」参照。
あなか	田舎	1	295
をとこ	男	1	738 ※「をとこ（夫）」参照。
をとこ	夫	1	妻夫 279 ※「をとこ（男）」参照。
をむな	女	8	154 738 752 * 886

《動詞》

〔い〕 射 1 306

いで 出 3 243 571 835

いひ 云 9 2 51 96 196 336 515 521 531 535

いみ 忌 1 338

いり 入 8 63 133 212 213 290 431 571 647 ＊ ※「いれ」参照。

いれ 入 4 656 ＊ ※「いり」参照。

うけ 受 6 178 192 566 849 851 864

うけたまはり 承 14 120 121 270 311 473 895

入レハ 533 645 ＊ 646

承リ 203 489 505

承ル 104 ＊ 154

女コヱ 108

女子 368

女后 383

女君 742

語形	所用漢字	例数	所在
うしなひ	失	2	失フ 842 893 ※「うせ」参照。
うせ	失	2	646 * 836 ※「うしなひ」参照。
うたがひ	疑	1	654 *
うち	打	2	51
			夜打 506
おい	老	7	22 * 30 37 44 309 487 510
おこし	発	5	635 * 806
			発シ 625 788
			発ス 633
おとろへ	衰	1	衰ル * 22
おほせ	仰	3	862
			仰事 202 204
おもひ	思	10	46 316 361 568 682 691 749 777 822 885
			承給 102 718 ※「たまはり」参照。
			承給ハリ 539

および	及	1	不及 659 * ※接続詞「および」参照。
おり	織	1	織物 351
かち	勝	1	797 ※「すぐれ」参照。
かなしみ	悲	1	577
かへり	返	2	返り 631 *
			返事 82
かり	狩	2	836
			狩衣 352
きえ	消	1	646 *
きき	聞	1	632 *
きたり	来	2	172 827 ※「としごろ」参照。
くひ	食	1	食物 510
こひ	恋	2	418
			恋ル 544
こひ	乞	1	60 *
こもり	籠	1	531

語形	所用漢字	例数	所在
ささへ	支	1	878
さだめ	定	1	761
さぶらひ	侍	1	702 ＊ ※「はむべり」参照。
しかり	然	1	雖然 890
しき	敷	1	散物 540
しに	死	5	86 836 死ナ 596 死ニ 260 561
しり	知	1	不知 863
すくひ	救	1	救フ 220
すぐれ	勝	1	649 ＊ ※「かち」参照。
たたかひ	戦	1	戦ヒ 445
たち	断	1	809
たち	立	2	山立 506 566 ※「たて」参照。
たて	立	4	525 762 779 798 ※「たち」参照。

たてまつり	奉	1	奉り 781 ※助動詞「たてまつり」参照。
ちかひ	誓	1	847
ちり	散	1	630
つき	盡	1	867 *
つくり	作	1	658 ※「つくり（造）」参照。
つくり	造	4	造り 812 ※「つくり（作）」参照。 玉造 538 811 821
つけ	付	2	51 677
とき	説	4	149 183 660 795
とどまり	留	1	留ル 630
となへ	唱	1	唱へ 141
とり	取	3	60 * 863 864
ながし	流	5	流シ 449 792
なり	成	1	495
ぬすみ	盗	7	884

語形	所用漢字	例数	所在
のべ	述	1	115
のぼり	登	4	725 871
			盗メ 814 863 876
			盗人 2 822 879
			登リ 765
			登ル 137
のみ	飲	1	213
はかり	量	1	657 *
はじめ	始	1	242 ※「はじめ（初）」参照。
はじめ	初	3	137 430 808 ※「はじめ（始）」参照。
はて	終	1	834
はなち	放	2	662 * 794
はむべり	侍	56	6 22 38 47 65 65ほか ※「さぶらひ」参照。
			侍ラ 105 166 552 880 890
			侍リ 30 65 77 78 119 207 308 450

わけ	やぶり	もとめ	〔むすび〕	むくい	みて	みち	み					まうし					
分	破	求	結	報	満	満	見					申					
1	2	1	1	2	1	1	5					137					
872	破リ 194	849	626	212	864 866	770 ※「みち」参照。	660 * ※「みて」参照。	54 193 193 482 628	申文 537	申ス 110 246	申シ 52	申サ 2 8 114 731 876	1 3 10 20 46 47 47ほか ※「ひつじさる」参照。	侍レ 106 111 595	侍ル 22 156 764		

語形	所用漢字	例数	所在
わたり	渡	1	138
ゐ	居	1	724
ゑひ	醉	1	692
をかし	犯	1	犯シ 194
をしへ	教	1	111
《形容詞》			
あまし	甘	2	26 * 252
おなじ	同	2	672
おほし	多	11	同シ 844 458 561 600 801 836 838 877 多ク 442 454 559 多カリ 807
くるし	苦	1	247
くろし	黒	4	22 23 248 248
しろし	白	4	248

すこし	少	1	784
たかし	高	2	675 685
とほし	遠	1	遠ク 295
ながし	長	1	長櫃 410
はやし	早	2	早ク 843 855
ふかし	深	1	深シ 768
むなし	空	3	487 ※「そら」参照。
			空ク 640
			空シク 134

《副詞その他の自立語》

あらあら	略	1	略ラ 807
あるいは	或	6	209 214 216
			或ハ 217 872 873
いかに	何	1	何況 894

			白ク 23 248
			白キ 23

語形	所用漢字	例数	所在
いはむや	況	5	173 211 220 663 *
			何況 894
いま	今	6	88 862 746 842 ※名詞「いま」参照。
			今サラニ 81
			今タ 69
おのおの	各	6	161 188 189 224 692 756
および	及	1	192 ※動詞「および」参照。
かく	此	2	如此 191 650 * ※「この」参照。
かならず	必	1	必ス 201
ことごとく	悉	1	868
「この」	此	6	348 141 514 614 798 891 ※「かく」参照。
しばらく	旦	1	旦ク 808
すなはち	即	1	437
すべて	惣	1	惣テ 161
その	其	3	656 * 740 819

ただ	只	1	773
また	又	12	6 14 20 106 185 239 324 385 431 512 760 800 ※「また（亦）」参照。
また	亦	1	650 ※「また（又）」参照。
まづ	先	1	808
もし	若	2	657 659 *
もろもろの	諸	4	273 432 612 887
わが	我	9	45 48 89 200 202 263 532 833 846 ※「われ」参照。

《助詞その他の付属語及び連語》

いへども	雖	1	雖然 890
おむ	御	60	59 69 72 82 157 266 268 268ほか ※「み」参照。
が	之	2	277 281 ※「の」参照。
ごとし	如	2	如此 191 650 *
さぶらひ	候	1	270 ※動詞「さぶらひ（侍）」参照。
ず	不	3	不例ヌ 338
			不及 659
			不知 863

語形	所用漢字	例数	所在
たてまつり	奉	2	871 ※動詞「たてまつり」参照。 奉ル 93
たまはり	給	1	ウケ給ハリ 752
たまひ	給	117	44 44 45 54 60 71 86ほか
			給ハ 284 771
			給ヒ 70 347 351 415 549
			給フ 607 761
			給ヘ 363 738 887
どの	殿	8	267 312 314 481 499 548 549 550 ※名詞「との」参照。
ども	共	3	390 500 777 ※名詞「とも」参照。
なり	也	12	137 138 139 140 161 235 242 399 434 573 589 639
の	之	302	9 36 63 63 74 91 94ほか ※「が」参照。
ばかり	許	1	許リ 517
はむべり	侍	133	4 9 11 17 19 20ほか ※動詞「はむべり」参照。 侍ラ 8 13 105 109 404 594 599 863

ら			み					
等			御					
1			11					
我等	御子	御世	御門	侍レ	侍ル	752 753 838	侍リ	
431	445	152	60	15	120		10	
	713	442	198	112	395		77	
	717		358	260	462		78	
	※「おん」参照。		445	265	499		151	
			475	316	559		155	
			482	484	602		206	
				752	664		271	
				757	733		311	
					760		353	
					883		386	
							401	
							534	
							537	
							561	
							684	

以上の如くである。

見出しの語数は347語であり、その内の大半（300語）が一字一訓の対応の関係にあることを、この表は示している。

三、同訓異字ならびに一字多訓の例について

右の表において、同一和語の表記に二種以上の漢字が用いられる例（すなわち、同訓異字の例）としては、次の7組14例が見られる。

①たま（玉・珠）、②なみ（波・浪）、③をとこ（男・夫）、

④さぶらひ（侍・候）、⑤つくり（作・造）、⑥はじめ（始・初）

⑦また（又・亦）

これらの例において、一つの訓を共有する二漢字が、筆者の意識において全く等価値である（たとえば、②で「波」とした箇所を「浪」に置き換えても構わないということ）と見なすことも出来よう。しかし、7組すべてをそのように処理しても良いものであろうか。各用例を検討してみよう。

①たま（玉・珠）

「玉」（11例）

○小野小町傳トテ玉造ト申文ハ弘法大師ノカキ給タリケルトカヤトソ承給ハリシ（538行）

○玉造人之家ニユキニケリ（811行）

○家主玉ヲ造リサシテタチタルホトニ（812行）

○鵝トイウ鳥イテキテ玉ヲクヒツ（813行）

○玉ツクリカヘリキテ（813行）

○コノ玉ヲモトムルニ（813行）

○玉ヲトラムトテ（815行）

○玉ツクリイカリヲナシテ（816行）

○玉ヲトリイタセトセムルホトニ（816行）

○玉アリケリ（820行）

○玉造罪ナキ聲聞ヲセタメタルヨシヲソカナシミケル（821行）

「珠」（4例）

○芾心之功徳モ亦如此（650行）

○清涼紫辰ノ珠ノスタレヲイテ、（706行）

○龍王珠ヲトリイテ、タテマツリケレハ（776行）

○龍王ヲトロキ珠ヲ奉リタリケレハ（781行）

「珠」のうち、648行は「芾心」を「住水寶珠」に譬えているところである。また、776行と781行の例は、「如意寶珠」のことを言っているのである。これに対して、「玉」のうち、後の10例は、ひとつの挿話中に出てくるものであり、職人の作った「玉」をさしている。したがって、それぞれ例外を含むものの、概していえば、「珠」は「宝珠」を特に意識した用字ではなかったかとも考えられる。

②なみ（波・浪）

「波」（1例）

○万里ノ波ヲワケテ他州辱（右に「辰」とあり。）旦マテタツネヲハシテ（53行）

「浪」（1例）

○沙羅林之風久跋提河之浪シツカナリシ（869行）

「波」「浪」は各1例しかなく、この例だけからは明確な違いは見出せない。

③をとこ（男・夫）

「男」（1例）

○御アニヲト、男女十一人（738行）

「夫」（1例）

○床ヲヒトツニセシ妻夫モカヘヲヘタテ、トヲサカリ（279行）

ここでは、「妻（め）」に対するものとして、特に「夫」字が用いられたとも考えられよう。

④さぶらひ（侍・候）

「侍」（1例）

○橘能俊ト申ヒトタ、一人法師ニナリテ御トモニ侍ケルカ（702行）

「候」（1例）

○朝光道綱ナト前之大将ニテイリコモリ給シモ病ノユヘトコソ承候シカ（270行）

右の「侍」は動詞として用いられている。その読みは、『最明寺本』に、

○橘能俊（ヨレトシ）と申ける□たゝ一人法師（ホウシ）ニなりて御共（ヲントモサフラヒ）ニ候けるに（12ウ2）

とあるのに従ったのである。

「侍」は、この他に、動詞として56例、助動詞として133例見られるが、すべて「はむべり」と考えられる例である。したがって、ここの702行の例は例外として考えることもできようか。

⑤つくり（作・造）

「作」（1例）

○須弥山ノヤウナル堂ヲ作テスヱタテマツリタラム功徳（658行）

「造」（4例）

○小野小町傳トテ玉造ト申文ハ弘法大師ノカキ給タリケルトカヤトソ承給ハリシ（538行）

○玉造人之家ニユキニケリ（811行）

○家主玉ヲ造リサシテタチタルホトニ（812行）

○玉造罪ナキ聲聞ヲセタメタルヨシヲソカナシミケル（821行）

つくる対象の違いを除けば、両者に目立った違いはうかがわれない。

⑥はじめ（始・初）

「始」（1例）

○人間之八苦ト申ハ（中略）始ニ生苦ト申ハ（242行）

「初」（3例）

○諸行無常ハ天ニ登ル智慧之初（137行）

○生アルモノハカナラス滅アリ初アルモノハヲワリアリ（430行）

○先旦ク初ノ五戒ヲアカスヘシ（808行）

「初」の137行の例は、『久遠寺本』では、「諸行無常ハ天ニ昇ルハシ」とあって、その方が文意が通じるのであり、『図書寮本』の例は、あるいは錯誤があるのかも知れない。

双方の用法を比較すると、「始」は助詞「に」を伴って副詞として用いられており、「初」は名詞として用いられている。あるいは、こうした語法上の違いが、両漢字の使い分けに関係しているかとも考えられる。

⑦また（又・亦）

「亦」（1例）

○荒心之珠ヲ身ニカケツレハ（648行）

「又」（12例）

○「（会話）」トイヘハ又カタスミナルヒトサシイテ、イウメルヤウ（6行）

○□トヲ、カルトコロニテ又ホトモナクソハナルモノ、イフ（14行）

○又コレラハアラマシコトニテソ、ロコトニコソ侍（20行）

○「（会話）」トイヘハ又イカナル難カアラムスラムトキ、キタルホトニ（106行）

○又四十里ノ城ニ芥子ヲツミテソレモタマサカニヒトツヒツ、トラムニ（185行）

○又一日三時ノウレヘアリ（239行）

○昔九ニナリケルモノ、母ニヲクレテ又コトヲサナキモノ、チキサキナヘヲモタリケルカホシカリケレハ（324行）

○年来ミヤツカヒシツキタリシカハイトヲシクヲホシメシ又アサカラスオモヒキコエタリシコトヲナケキテ（385行）

○會者ハワカレアリ日イテ、又入ニ（431行）

○庭ニハ草ノミシケリテ又モサシクルモノナシ（512行）

○又佛ニヲノ〳〵誓願アリ（760行）

○又大願アルモノハ焔魔王宮ヨリカヘサレタタル事多侍メリ（800行）

「亦」は、副詞として用いられており、いわゆる「モマタ」の例である。一方、「又」の方は、512行の副詞の例を

除くと他はすべて接続詞としての用法であり、「又・亦」の使い分けには、こうした意味・語法上の違いが反映しているかとも考えられる。(注5)

以上、同訓異字の諸例について、いささか強引な解釈を試みたわけであるが、一応整理してみると、次のごとくである。

一、「侍」は、「さぶらひ」の表記にも用いられるが、「はむべり」の表記に用いられることの方が多い。その点から考えると、「さぶらひ」の表記には、主として「候」を用いるのではないかとの予測も立てることができる。

二、「初」も「始」も共に「はじめ」の訓を担うが、「初」は名詞を表すのに用いられ、「始」は副詞など他の品詞の表記に用いられる。

三、「また」においては、「又」は副詞・接続詞ともに用いられるが、「亦」は副詞のみに用いられるといった用法上の差が見られる。

次に、一つの漢字が二つ以上の異なった語を表している場合（一字多訓）を考えてみる。

一字多訓の例としては次の17組34語が見られる。（カッコの中の数字は、当該漢字がそれぞれの語の表記に用いられた回数を示す。）

①衣（ころも1・きぬ1）、②前（さき3・まへ2）、③下（した3・しも1）、④外（と1・ほか2）

⑤（とこ1・ゆか1）、

⑥空（そら1・むなし3）、⑦申（さる1・まうし137）、⑧我（われ8・わが9）

⑨入（いり8・いれ4）、⑩立（たち2・たて4）、⑪満（みち1・みて1）

⑫失（うしなひ2・うせ2）、⑬勝（かち1・すぐれ1）、⑭侍（さぶらひ1・はむべり《動詞》56）

⑮此（かく2・この6）

⑯御（おむ60・み11）、⑰之（が2・の302）

右のような場合、一つの漢字に対応する訓をどちらか一つに限定しようとすることには、無理があろう。これらは、双方の語義に明らかな違いがあれば、文脈による読み分けは極めて容易だったと考えられるのである。

従ってここでは、用法上特に偏りの目立つものについて触れるにとどめたい。

①の「きぬ」は「かりぎぬ」と複合語の形で用いられている。

○香之狩衣ニ白衣ヲソキ給タリケル（352行）

対する「ころも」は、単独で次のように用いられている。

○タトヘハシツタ樹ヲ一日衣ニシメタラムセムフクノ花ハシカ花ヲモテ千年薫ストモヲヨハサラムカコトシ（651行）

なお、右の「衣」を「ころも」と訓読するについては、『最明寺本』の次の例（傍線部分）を参考にした。

○たとへはせむふく花はしか花をもて千年ころもにしむといふとん栴檀香の一日ニおよはさらんかことく（2丁裏8行）

③の「しも」は「かみ（上）」と対になってあらわれている。

○コヽロアルヒトハマツシキハカリ上モ下モカナシキ事侍ラサリケリ（552行）

「した」の例をひとつ参考までに掲げておく。

○地獄ト申ハ閻浮提ノ下ニ一千由旬ニアリ（159行）

⑩の「たち」は二例とも「やまだち」の形であらわれる。

○マシテアヤシノ下主トモノ中ニハ夜打強盗山立海賊ナムト申テアサマシキコトヽモ侍メル（506行）

○海ヲユクモノハ海賊ニヲソレカチヲユクヒトハ落馬山立ノオモヒアリ（566行）

これも参考までは「たて」の例を一例掲げておこう。

○普賢ハ十願ヲ立給（762行）

⑮の「かく」は「ごとし」を伴って、「かくのごとし」の形であらわれる。

○如此ノコトヒトツトシテタヘシノフヘカラス（191行）

○**非心之功徳モ亦如此（650行）**

なお、送り仮名によって、もう一方の訓と区別されるものもある。

すなわち、⑥の「むなし」は3例中2例が「ク」「シク」を送っている。また、⑨の「いれ」は4例中3例が、「レハ」を送る。一方の「いり」にも已然形の「いれば」が1例存する（647行）が、その場合「レ」は送っていない。⑫の「うしなひ」も2例ともに「フ」を送る。

そのほか、⑭の「侍」については、同訓異字のところで取り挙げたので、ここでは触れない。

四、まとめ

以上、表において示されたごとく、『図書寮本寶物集』において、和語表記に用いられた漢字は、その大半が、特定の一和訓を担っていることが明らかとなった。特に一語に対して二つの漢字が対応する同訓異字の例は、極めて少

なく、しかもその中には、両漢字の間に用法上の差や用例数の偏りの存するものもいくつか見られた。

かくして、『図書寮本寶物集』中に使用された漢字における、和訓の対応の実態が明らかになったものと考える。

なお、当資料に用いられた漢字の中には、今日の我々から見て、同訓異字の関係に立ちうると思われる漢字が併存していながら、用法において歴然とした差異があるものもあった。たとえば、当資料では、動詞「いひ」に対して「云」が用いられているが、同じ意味をもつ「言」は「大納言」「中納言」を表すのに専ら用いられており、「云」と競合することはない。また、「河」に対する「川」は、「三川入道」(399行)「蘇我之山田石川丸大臣」(442行)のように固有名詞の表記にのみ見出せるものである。さらに又、人物を指す「もの」においても、『図書寮本』では「物」が専用されており、「者」は「從者」(12行)「迦葉尊者」(428行)「會者」(430行)「智者」(569行)「教此経結縁者」(803行)のように、字音語として音読されるか、又は最後の例のように、引用句に見られるもののみである。

このほか、「船」に対する「舟」の例は、その漢字そのものが当資料には見出せなかった。(なお、700行に「舟」かと見える字があるが、文意からみて「丹」の異体であろう。)

これらの事を考えあわせる時、『図書寮本寶物集』における漢字と和訓との対応関係は一層はっきりしたものとなってくるであろう。

(注1) 小林芳規博士「古事記音訓表(上・下)」(岩波『文学』昭和54年8月・11月)

峰岸明博士「高山寺本古往来における漢字の用法について」(高山寺資料叢書『高山寺本古往来表白集』)ほか。

最近では、峰岸明博士『平安時代古記録の国語学的研究』（昭和61年2月、東京大学出版会）がある。

（注2）　これに先立ち、平仮名文における和語表記の漢字について報告した拙論には、次のものがある。

「藤原定家自筆平仮名文三種における和語表記の漢字」（『鎌倉時代語研究』第一輯、昭和53年3月）

「平仮名古文書に使用されたる和訓表記の漢字」（『尾道短期大学研究紀要』第29集、昭和55年1月）

（注3）　小林芳規博士「中世片仮名文の国語史的研究」（『広島大学文学部紀要』特輯号3、昭和46年3月）による。

（注4）　小泉弘氏編『古鈔本寶物集』による。

（注5）　築島裕・小林芳規両博士編『中山法華経寺蔵本三教指帰注　総索引及び研究』の索引によれば、『三教指帰注』では、「亦」は副詞の用例のみ、「又」は接続詞としての用例のみとなっていることがわかる。

（昭和63年6月8日　提出）